



平成26年5月12日  
卓話『基礎学力向上の行く末～雑感～』

特定非営利活動法人 CEセンター 理事長  
School Psychologist(学校心理士)

野田 弘一 様



僕の肩書はサイコロジスト、心理士です。学校で授業観察をしたり子供の検査をしたり、年間で延べ300校ぐらい回ります。今日は「基礎学力向上の行く末」の話をします。

最初に読んでいただいたのは、どなたが読んでも何が書いてあるか分からぬ文章です。実は全国の小、中学生の3%前後が、このような分からぬさを持っています。残念ですけど日本の学校教育では、こういう子供たちをサポートする方法を持っていません。脳の中ではまず最初に、それが文字なのかどうかを見ます。次の所でそれがひらがなか漢字かを見て、それを次のところで音に変え、さらに次のところでどんな意味なのかを考えます。たかだか読んで意味が分かるだけでも脳のいろんな所がこうやって仕事をしています。先程の文章は音までは再現できるけど、意味は分からぬように人工的に作りました。実際にこのような子供はいるわけですから、音の後、他の方法で文章の意味を理解できるように補えないかと考えました。先程の文章を絵で視覚的に補つてもう一度読むと意味が分かつてきますね。このように勉強が苦手な子供にアプローチする方法は無いわけではないと考えています。

基礎学力向上って中々難しい。大体、学校に行けない子供の7割から8割が発達障害か精神疾患です。でも統計がないので中々メスを入れられない。この課題はもっと科学的根拠に基づいてやっていかないと解決は難しいと思います。いじめによる自殺が今、教育の問題になっていますが、実は自殺の一番の原因は学業なんです。

我々は授業の前と後にどれくらいの子供が出来て、どれくらいの子が出来なかったのかを調査しています。優秀といわれる小学校では最初からできる子がいるけど、駄目だと言われる小学校は、授業前には分からぬ子供が結構多い。でもそれでもいいんですよ。これから授業で分かるわけだから。僕らはそれを支援するために最初に皆さんに体験していただいたような、神経学的にできるようになる方法を考えました。その方法を使わない場合、授業の前には分からなくとも授業で出来るようになった子は大体52%ですけど、その方法を使うと大体75%の子はできるようになります。最初からできている子を合わせると95%ぐらいになる。こんなに美味しい話はないと思うんですけど、学校現場に受け入れられるようになるのは中々難しいですね。

勉強ができないと子供は大体思春期を境にドップアウトしやすい。それを本人の態度とか規範意識の問題で何とかしようと思っても難しいです。塾や予備校に頼らず、学校そのものが子供たちを本当に成長させなきゃいけない。学校の先生も大学を出て教育者として身分を保障されているわけだから、そういう恵まれた自分を子供たちに還元していく、その積み重ねが本当はとても大事だと思います。

ありがとうございました。

